〉13
3231
2下

門へ13
3231
2

専用紙使用
精工印刷
不破不落

四十八癖二編

癖所謂癖物語

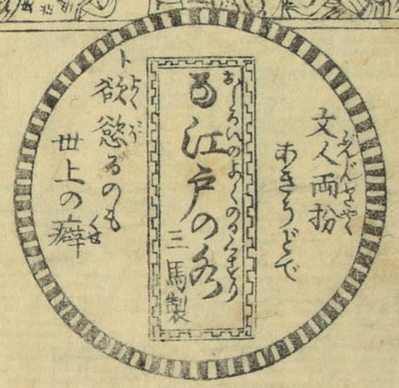
式亭三馬作
歌川國直画
鶴屋金輔版

昭和 年 七月 四日 購求

四十八癖

二編自序

四十八癖



文化十稔癸酉正月發行　全九年三月上浣

本町延壽丹乃主江戸の水製法乃開ゝ

毫と灑ぐ　式亭三馬戯作

眞君曰吾一十七世爲士
大夫身未嘗虐民酷吏周
人之急濟人之乏容人過
憫人之孤一心如此聽命
於天若依茲行天必降福

四十八癖二編標目

○幇間めくと素人の癖
○大言を吐て諸道を訕る人の癖
　并に克く應答をする人の癖
○蔭で舌を出す人の癖
○金を溜る人の癖
○金を無ち人の癖
○浮虚なる人の癖
　并に不實者の癖

通計八種混六扮

脈を診る癖

はなざりめを押さ
ちょまをさ
二三度
しそ

病人のあと
「どうでござるさ
お食べなけまさる

ちんぐのろまる癖

あうあう
ひらもく
ねでる
しそ
ハン

人をよびうくと癖

「はハく　おぐ用ぐぐのうこ
やく　はハキイ　はぐハ
「ようこんぐうう

酒の酔うる癖

「コレサ　あくくちくちくんなの
あぶなるるくくんなーくさ
俗酔よりのうま
「あうあ　酔やア
しー　移よ

あ
ふーい
だんな
どうも
ふくく

いさきの紙屋をうる癖

まぬぐいをあうう
ひよいとあらまあ
ゑおのあハあうへ
ひらきて紙ちう
ふんどーう
ひぐろかぐろう
ふ

ちうりとさうう
あゆのつまさきを
やくれて　ー　ぐうみぐう
あめさんの　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ
イエサ　ー　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ
ゆさてかよーんべハン

壺の口よりよ癖

あうらんでうくゑゑんん
アくウあんやうくくぐく
ざいまくくぐアくウ金ゑ
どんぐうくくくくくくく
ついぐよくくくくくくく
ぐけてくくくくくくく
アくうきのふのるわ
ゑんぐいまくを
くくくくアくウ

いくりのを
うんまいまくを
アくウアくウ
あくれくくう
ぐいまくを
くれくくう
アくウ
アくウ
アくウ

幇間めうと素人の癖

俗座敷がゝりとのみてきろ〳〵と世ろうの業もあるべし。うるけ者の渡世きゝ〳〵。年中紀のさとねだうかぢつて居て。あそびくらべ仕人のうまんつたあり。きくくる一家紀彰紙ゆちあぐゝ。同輩の人中「あゝ弁ゝ」「あぐろう紙つくしぐのさげさゝとも

ゐろさまくゞど。
恥を恥とも
おもつゐべ
恥
え
る
た
も
是いろゐれば。

他の彈で角力
ろゝんとゝ紙ゆりくべろ。
食後るとべを志〳〵ねハ
食つゝくるもゐゝざ。
酒色の街わ業を
さゝして。たつこのち
同行の行ひさるも。
他のあゆまり紙食ひ。
鏡の紙ね酒を吹くるる
ゆゑゐるへゝ。▲たちくゝと
南蛮一ゐのまゞひをよゐ弄て。
緋ゐるの業。下ろへ一文十八々
ろゝゐるる。ゐ園本綿のさゝさ溜ゐ。
ゝゝ。ねのゝゝを付けて。ゐ園ゐだゐさゝと
きゐゐゐゐる。ね濃い悪ゐむざと見さて悪さんゐ

ちう色にまがねいの縦筋大きくめちうん仕立へ中へまがりはじめにせんしい
ぎりのふちう羽織。繻子をまぜとたつぷりへさせ。紫の糸の二筋赤い細を
むかし高ぶむきび。めくるへまごと毛をうまくし。由兵衛清奴。丹前なもおが
宗十郎の声色をつかふもあり。料理茶屋のそゝぎをぬくとあがつて
まり。ゐくむいてさゝずりふありて。片手をまゝり人かけながら。一ッぺん
ぎりはとゑこぼし。「ヨウトふしろくそりまりおぎと申すかなコレ。こいらござれのぞ。
細かも遠もおちら好くの今朝あき湯へ行て運気考さしところが。おかみ
さんがなでつまり逆海ざト。ウレ。おそれるさ撫腰ろを鱗ごうらしとおつて
二軒め仲さ。ヘン。家に暇ときへ要にもちらずざっ。シカシ中らずとおへども
遠ざうるおぎざ子。イエサ。二軒の内ともつく図がそつごさろう。待よト考ながら
家のおをあるらう。二階で半裏さんのダイリが聴申さ。エヽ。あの
ゑ。ダイリへ天地塵しとらへど。家に一人とあるめ人子モシ。アハヽ。エ。ハヽエ。
編み文。あつちの方で悪口が始まるどもりうし。ゑ猫めく。ゑ猫め
ゆ経「ウツ。ト ハヽエ。ハヽう
悪にがきくさく好く。コレおん鉄坊。何やで呼ありんす。ト よせをやく。やく。ありぶさく

野郎の清姫さへ。ぺン縁を追つてきさとらへおつろ。てまづ安珍のくちすちなし。ドキニお盃
のお相へござりませんかな。ヨツト頂戴と会釈めくのろト一ぱいアやりと
人仏ぞ。モシ。ありうの蕃椒は来太河にありゆさ。ハイおつ申さ。トらひながら玉子ふやきを
ゑらのお名の晨屋がにおみ紙ふやせろ。仏壇の前着ではへどうりざ。半
表さんも木裏さんも家の暇な仕舞さ。一寸お使者があつても四肘へおちら
みまとめくへ ハテござせコろうふ見てすれるが因果へ付まけス。それやアきうと
ひ出しおの揺子みちやや。一番目は切れるとの幕ござる。「由良の助おそ
ろるへゆへい。子でがうろくごおりのさる食ふ法にせう。買うへ擬食へ
法太る。幸坊太師ときこえるぞ。コリヤ。なんにもいふる洒落でへるの
トヌ宗十郎のドレく出しおを一見せなやと存け。まづ昆蒻歯ない笑うの
鶏卵ござらうス。今朝へ鮓あんまりお早のろう。まづ是でお一つもろ玉の
鶏卵むきやく。トコロデ。ゆふべの残を。家にある提蓋へ積で出しさとらに
おろう。其姑のよせりの。ころが悪く其へおつでいろぎト。小海老の照焼が
落武者とらへ発で。たつき二膳におきされてある肉が不便ござ。さうろと
おめくべ。隣のさこぶしへ小刻おの売とらへ発で。かぶけて余り合ひ居るが

一つもまつらぬぞ。宴ふさうたり。髓のうえ移くあぐある。こうへ行の
行ぐらう。ハテナ。あくく移くハエ。チト接ア香でも嗅でえ中う。ト中略を
ハテナ。鼻をるーーとらくども貴らぬと。どうもきき移く。エ。行エ。そぐらんら
お。今一度ちやらんで。新中きくと食られてい赤まへまい。新言ちやどうう
狼ふ食教されて行ぐ敵行ふ。ふさらうとりん像ぐる。サテく宴う行のも食よ
乳ハ赤ーー。宴臣とらん青を味ちやらうくう移く。チョツ。嫌む
べうくぐ。朕ダ不徳とあきくあるるぐ。見うくう泥でも食う。トキニ。これより
二番目とりん青ぐ出ぎうなりんぐる。トりんぶへ初限のうをあ青ありぐく。先刻うう
あきくうふある吸あ接の中く魂ぐ中ぶ青ぐ。ヘン安い中ぐ。りうふ行
うう来ぐとてあれぐうの味噌吸ぐ出ぎうあぐくへあもつくぐこと
ぐ肉湯者ぐうう。だまアんでみ中ーく。まぐ吸ふありつき。ハア田舎味噌
とひ移つく内ぐつ。ゆんぐ三の猿い名古屋味噌る臭へ味噌でいくと
ぐうう洗く中を。ア泥とうて行も出ぐと移く不ぐ山ぐ モこ宴の
肉へ赤つよ宴ち中きとう。今る屠中寄妙ぐ。あの言うう行ふも食くも
ち移く不く中ぐうくとぐぐ行けて出ぐを肉い青陳ぐ。其へ教をえ切て

生をとりん中ぐう流ぐ。ちくこと三人の生義へ大神の頭変。大平へ
切ぐ山で松茸ぐ中を肩ぐて。切角と竹輪ぐ三猪ぐ。ちきて中のも
中でごぜく中をよ。宴らの庖丁を食ぐて中ぐ移くぢやア料理通ふあ
らぜさ。コウ娘。へこ娘と言ぐくう。俳ふ返ぐちぐうぜ。コウ料理業へ
酒岸ぐう中ぐう。ナゼ。肉ふ再ぐるぐ。ふ食ぐ出ぐ中ふ
猪ぐう。ハア。こりんん宴ち擂ひ赤ぐれ山移こ。シカこりう泥ぐ食ぐう
中ぐうさらうの。コウ中ぐうさう早く二ぜんの紙出ぐておくまと。ヨツトまちう。
これものハぜとものすぐらう。下で如猪ぐあるぐ。それへそれでよーし。
宴でちまハグットフレあつうく狐を中ぐてあくひて。二三日つぐうく猪ぐう
猪ぐて中泥ハ赤ぐ移く。ナニ。叶泥を中ぐ移く。泥宴
ぶ下盞ーてハ泥の羅ぐある。お猪ふ猪のよさふで半表さんへよるとりん赤
ぐう。半表さんハ他ふちうう強て。ぬーーこうくのぐれさぐテ。強酒さんへ
半表さん。ひうぜろんこひうハどうぜっウツ。ト例のヨツト猪出来ぐ。
く。猪ぐうまぐう宴へ泥んでくれぬく。行。どんぶりでやうまいぐう
もまぐう移く。ヨツトこぐれる。コレサ素くらーい。ぜうーーまりんぐ。ちぐへ

かくら舞くやうふ。コレサク。こなうけ二猿のようごとく。ゑんよふ拍らア。ちんあよ。
今ここそ志ま孫くが土用干の時こそ。ゑると酒涙の痕ゞ白ヲくかゞて。
猿のよふ日本の図ゞ現れらア。コウお婆。てめくふ老て寄う。編編の
ゑんおく酒ゞかろうろう幸いの厄をよくふりろけて。皆くぢろしてみるさ。
忽ち爆くろう爆のうろゞ厄をろろう捨て。ゑをろろぐい。面ふ
ろうろぢ涙もはろうぢ。是ひとうお是なされても女中ゞさの情弱
笑はれ用とあるべ御受あふ。二十日朝とあるふへ是中さ。イヤく美の者
さうでさい。我ふ出来てもおれふ出来まい。とあ是合のうちろう
ろう〜愛中ふおでもさふ。コリヤ面ゞ看板。元朝ろう大晦日中でけふゞ宝庫
蔵ゞ遠と買ゞ遠。ヲット来酒。ごアうやア酒涙ゞ今表さるふ
ちんとうぢぜ。女も附るちやア きろ孫く。酒をかけされのことよ。いレ
ごうぢ。ゆ気ふるるをいふせ まぢろうあんまり下ふしろへ
忘寝いるうさ。ヤキニまま表さん。チトよまを。ろう右のまを是ろうつき。
ちりのまで猿を ちろうさ。是中を斜ふろる拍るまでふ。ゆ表さんも
酔を迎ちろうこふア。なぜだまろう。酒ふ酔ふとだんまりのゆどりぢ。又

お中ろ。是向も久しふ中ろさ。是の往く交ふお押ぐ子。お表さん
お間。ナニサ間ふおるもしいぢやア孫くろ子。そんろう拍ゆぢふ
のむろゞ〜。ろかこ拍むぢけろちふ一盃の徒ゞある。ゆゞ飲ゆ乃
美酒ろ。ウウ。ト例の是ろうも酒をのさぢるろど欲を志ると。和紅の
ごでふきろ孫くろ是ど。ごろうもモこ。酒蔵ふ石ぢ子。欲だろて猿を
ちりぐる。へこ俗ゆ奴ぢ。酒を飲でむぢろちをたくふて一ひよこゞあらう
んまろう。是ゆて中平ス。女房賢ぶ嬢ひ芝居ハ取さるゆふ
酒ハ喫くも酒是ハ爆是を是て中も弱く。ゆ有ハ中ゆまくて中は免。是
猿ゞ金ぢろう ちりぐて間に是干と着ふ現世ろうの腸鬼道ぢ。あ
アやアおゆさんくるの法ふ中りぐろう。ろろうぐ目ろうふ勢ふ迎ふと
おりふ。ナニトいろそのるお飯を取ふ拍ふ志ろうよさ。さうなうんぢ子。
是ろうらぐ是ぢやア中ゆアさろぐ。世の中をろうと中だゆふ拍ろう
ふぐ。ハテそんなりゆさ。ハテ拍り中さ。拍ろ孫くでけ中ねゞ知是ゆ
りゆろ。まゞ中一和又や和紙ゞ是ゆさ。ふぐ拍方拍ろてみる
ゆんぢろう。ろるゞ貪猜せぢろさ。女房ゆ子ぢとふゆりろぢ。現是

つき合せぞ。ナント悟つさめんでござへせう。ねら悟つてみると。高
臺が無ふなつて。山奥へでも世の紛のがれて。天窓を丸める内ん
ござ。チトそれも古風な悟りさ。それをぐるつと裏をかへして。炉ごさ
あくるで山奥へおちろう。肉にみてさく淋しいろう色と酒の徳利
まんで口ひきるさつずとふみるとらよ所ハ。モシありがてへだちやア殺へう。
ハテ変らぬ悟の境。ヲット者ハ拙者が独自中ふめしあがる。コレサく。
其の慈姑よれ今のるすご。ぜんえの鶏卵の裏を返さナ。エ今の悟さ。すつきやア情
がれ。今の。丸呑ふしろと云しいめんど。モシ十裏さん。さりしらへ
あのさき論言ござる。此まあ慈姑がどうして丸呑ふいくめんろ。生の
鶏卵を鼓でとぬりく食ふのへおお吏お難儀ざなれど。此慈姑ハ
おそれ中まと。コレサおゝ殺。てゆへまでが同じ様ふ。コレる楽ア云ゆ事。
此慈姑を呑う物あら。咽がごろくり詰まぐざ。今のエ。ね食が醜上。
中がうせんハ又ふさがせる法ら。十裏さんハどうもあらら殺へ。アレ又。
千裏さんもだまつておのでなまらうと思へぐ。出物悟りのワキ師の指ふ
時ぐ独吟が出るゆまと。此慈姑が丸で鯖呑ふまるめのら考へて居

覚じやその。あまり他の子ども捨ひス。コレどうもあらら殺へ。先達て
病人の為へ寺供の時も。活きる蜈蚣を山葵醤油で食ひらせまして。
家根の上へ疵ると彼の瘦浪人の蚓汁へ。蚰蜒の遠巡さむうを。お前奮で
又食へぐ。にがにがしへ他の者で泥鰌ぐろの食もせうが大食傷ざ。モウく
悪洒落ハ其い平にく。ハテサ丸呑ふのめぬるう呑もせうが。慈姑ども
其の味をおそるぎさく。ウワ。ト例の手ごうもあらら殺へく　ト舌

大言を吐て猪道を誹る人の癖 并に よく請合ぐちを立る人の癖

○金があつてたんと紙ねうちを高くがハイくとうけてあうりあるをよるすと
紅毛されおもしろの人かしけしとらの人お●コレく奴助子。めうちうと
まうがらく。きのふ孔雀が私がらおみなりの紙めらろくさ。今を。アノ紛ぐさ。
軸羅洋でされるハンカーウー。とらのめのス。さぐつて蕭ぐさらう。▲イエ
存ません。今のら珍奇な物でござりませう●これぞくりの壺へ積て来かく
いづも国産にうまれ物へ絶てまへ。ダガあつてごろを。▲ヤそれからづきとへ。

どうも始末のわるい。あまうこ（だう）珍物から
ふきつけの内があそれへまを●けるる物産家
ふれづけくくく和名紙さのぐりとりくさくさ。
ナニカ名お味噌で漬ことゝえて。さまざま
陰が亭い。▲でござりまさろ。エヱ
さるわど。これいさまうでござり
ますう。へイく。いづれさま。
自然とあつまり情まとれが。
回れの情威光でござりまとへイく。

●是ヨ。何ぶよくこその者と一緒ふ
きのこの壺を出りてくるくや。ナニカ。
ガるいお繼ろ。ア。改ろ。改ぢやアらろ。
ガるだろいお繼ふさせるぶく。
他の者ハどうもいろ。
こゝとい酒ぶむづ色い所謂
地酒おそつとらふ酒で。
悪酒ふ出現のよ所変ふ酒を
されてこれおそれる味さ。▲さまうで
ございまとへイく。酒い酒ぶ貴一
●こゝといテトあつの方ぶ好さぶ▲へイく。
酒いあつのぶ強うございまとへイく。何
大きく中でございまとテへイく。●そこで色い
他ふでいのま酒く。そこくりてきついのい酒好みど▲酒好さふい
あれい別でございまとへイく。何でもやーあぶるうち強で

ござりやす。ヘイ〳〵。イヱモシ奇談がござりやす。あなたのお嫌ひな茶箱
さるが。ひるの茶湯のさんまへ。縁ふサ。そりやさまつてござりやすが。ヘイ〳〵
先日もあがりやしたつけ。ヘイ。伊賀のおさし。ヘイ。その節ふ。路へ源氏と
やさしい宗丹の茶杓を拝見いたしはした。ヘイ〳〵。それハ誂ひ物の▲ヘイ。イヱ
どちらうろお借りなさつた掛子でござりやす●井戸の茶碗を拝見
ぢやア稼へろ▲ヘイサ。夕べれまとやまと銘で。ヘイ〳〵。あれも借りのでござり
ますと●おきやアがれ▲イヱその外ふ奇談へ。あなさしてござりやす。正金
六十あまり物ハいやイとあつて。私どももがヘイ。五十あまりの請人ふ点ようとらふ
下されの。豪州さるの五月あると手を序彼の手紙。勿論へらしでござり
ますさヘイ それを添て二十あで此るはのへやすさげさ。ヘイ〳〵。よなどの古
堀出しでござりやすと。ハイ〳〵●高金な物を安く家の錄のある宿の
業で稼く。ハテ主るの物ハ主るく買ふで。買ハうちが後世ふあるといふ
めんど。ほり出しと云てうましいがるの商人ののるをござるを素人ハあり
出されるかしく。ハテサ。價の貴のふで道具ハありもある。自慢ゆもあるが。
下料な者でへ秘蔵をる甲斐がないでござるを▲ヘイ〳〵さようでござり

ますと●ア。茶箱が茶湯もよせべいのるさ。まぜござらうにぢやあがりやう
窮屈な遠ひよつて乞食の茶碗で古風の紙猫んざやうか
青への湯をのむるも稼へて。その上で亭主の身ふ隠のさりの紙
一くふ石のまころざさぎ。俗のるやへ稼へ。ほらへあうけへ古い紙の反で。
びんぼう律の茶をさるやうなめんど。あの男の見識もあるまいで
あられくさりんど学問を仕いとらつても言行お違つてある。なんとて
く。篤行の君子といふりのぢやア稼へ我日本ふうまれて唐山の
るをのの義しがつてるうら。本意で稼へ。▲さやうでござりやすさ。ヘイ〳〵
居を品川ふうしての漢王の裏店ふちつよくてあそひ驕を
目異よ殺ちての唐人の人別ふ入つらんるのを新るといふ。否でござ
アるのさ。ヘイ〳〵●そこさ。あらし又茶箱が内君子国学をしじめさ
とうかして古い写しをむざ言ふやうふお無茶家の和文を書く
ゆもあつてゐる。飜訳よう猿田彦をうやうふ名をあろつて。異国の
名古をきれど。皆何ういの声色さ▲ヘイ〳〵。それの日出る国もう
やて。日本を貴む西への拠よりしうござりやすと。鬼角無体く

和学者は和学どうも日本魂でござりますまいて。●あれハ念仏と
洒落。古学家と後世家。犬と猿。下女と調市。どうも中のわるい
ものでござります。国学者もよくされバよかれど。聚緒万葉ぶりて。
古めかしがけかゝる人を大きに嘘しまして。それハおかしうござりいふに新地
新道うらの安楽でも。新万葉とかいふ事の体を立てござりますへでも
ござりますが。まづ浅草とかいふ事をよのやうス。
どうもぐさいあしらひをどうかさきびさゐるさよ今を本によろこと

泥海浮　足腐　魚漢　氣味悪　汲来

▲これハまでよふ古律ぶつてれハおすさ。イヤモ実に感吟仕りまする●どうで
ござりませ古学者でハ郷へよりかねてナ。近体をよまむすハいくらもある又
和学家の類ぶつて。これハいふふハみよおね。扨ハどうでござりますも。久しく
あらぬが彼季氏麿が礼辞ハ▲やこれハ。まあとくでござりまする●君
角觝ぶさめぬるのこまくさりのぞ。嚢をうくふの鼓をうつのと。いや
ざるぞさ。畢竟いづれも畜生の皮をなめして楽器の鳴るをするやう
なものぞ。まあべて此の業によくるぞ。ヲラうぐ団ろしてへ猿の児の戯ぞ。

づくとふたへね。まづ碁将棊とふものが嗜の風雅。鋒を獵
て此のが徳となりへ、後のへるだろうさ。侍哥連俳。香ぞ茶の湯
遊藝もぞべて屁のやうなものでござるさ。六藝の内にも能中書家で。
それも世上の書家ハおほく能筆ぶつ。かの名ん家せへ仮在行
が手本をせ。あれでも書家の気ぶるぜ。和様へ俗ぞとかいひて唐様
を書く事ぞ。所謂不俗の筆で。揮毫筆をつかひ。只文字の更に書法と
いふ物をまるへ殊へおもへ声ぞつるひで。只文字の形を似せて
他をぞくしね。あのこと筆書奴と云ふて文字の奴ざとある。和人の唐
様を書かりるものふと。唐人をいろぞ一ト者込む気でならうのが。
真面目といふものを下らんぞなふ墨蹟ぞなろうじらう。さも寄くう
たうね。ハテ墨翰といふものハ。まづ真蹟を瀉鉤にして石に上せ
ほかの刻もする。ぜんぐ搨しる内にハ真蹟とは次に遠くて。細水練
の趣ハんぞ。死物の抜がらを翫ぶやうなもので。
巨燧妄法といふれどのの筆でござりまするも。あの男等へ見識が
侘へ。これハこでつき合ひかねでござりまする▲イエモあなたの仰ぞまことにお

一寸くお酒も、へイ〳〵まことに高論でござりまする。へイ〳〵じつぜて氣が付

つけてよくおのみでござりまするが。兎角目のさめねでござり

まするで。へイ〳〵アヽ〳〵●サア〳〵酒が来た。一挑嗜しめへ▲これはい

いつもながら雅器。へイ〳〵。イヤモお酒好はまことにおそれ入りまする。へイ〳〵。

さかづきあふ清盃を頂戴。イヤこれは実に奇絶。ヤこれはどうも実

に奇絶。へイ〳〵。イヤモおそれいりまする。ハア是が彼おちやさのハンカーヤ。

ハテ奇絶。ヤこれはどうも実にのうへイ〳〵。清酒と申へイ〳〵。イヤモ

ありがたいの仕合せ。ハア甘露〳〵。ヤモ実に奇絶。へイ〳〵。へイ〳〵へイ〳〵。

三馬うりひろめ店 [illegible]

お顔のくすり あらひ粉おしろい 薄化粧(うすげしやう)

大包 百文 小包 五十文

あつ化粧をきらひの御方 うす化粧があざやかにて [illegible]

◆うすげしやう [illegible]

江戸の水 [illegible]

小児百日ぜきの妙薬

さしこみ [illegible]

一包 代百文

酉の正月二日より賣初 式亭三馬 戯作 [illegible]

金勢丸(きんせいぐわん) 代百文 五十文

酒の毒をよく [illegible] 一度の妙薬 [illegible]

麝香細辛味 箱入歯みがき 代三十二文 五十文

[illegible]

同 あらひ粉 龍樹散 代三十六文

[illegible] 三馬 年来

志やくの黒薬 代五十文

[illegible] 根をたつ

おしろいのよくのるくすり 江戸の水

五十文 三十二文 百文 六十四文 百五十文 [illegible]

[illegible]

にほひ袋 蘭奢袋

雪の友 金百疋 月の [illegible] 百五十疋 花の [illegible] 金二百疋

他家 [illegible] の製法 [illegible] 極上 [illegible]

落で舌を出すと人の癖

へんべつぎやうの。会稽の文盲聽元傷肉の
くせふ。あつきてみれば。くらとろつて。
さぬぐるぐるくをつきさるるぎんど
ハニカーツー。をしくも孫くりの紙
食べさせて。うねひとりだうそを
ぶちこあげるかつさ。
やしくくくつも
うけさそく。
ちろうりうけ
させて。ぎんぞの
時銭を引出さう
とおりへうくどひるく
うけてへみるが。ちろうの

者ぶるるくつづくちんがうぢやう
孫くやしくくちろとらへ息ぶ出る。
まづ酒の粕うくすでまつて名酒のうねだれ。
紙の赤のあまぶ名酒なりのう。金紙持さ出さう
するわど生姜ふきへ出ろ。口ぢうたいさうまわろ紙ふのても。
あいくうぶのむ酒うくうんてへかげも孫くやしくくちろとらへ
紙屋の菓ろ。土産屋の七り梅。さてへ焼印の紙菓でおくてへ孫が
合点しく孫くそれふぎんざ。なのごりのくぢ孫おくうをつけてあき
なのぐう。や悪酒ふ出ぢもさとるのしい。ナニう菓の湯のうけも出ぢんど
ぶくて。和尚ぶどうぐの。漢文がかうぐのと。へこあきやつぶれ。法蔵会
を得道でねなぐう。書の泳法まで。さうくうあきれるへ。世の中の
きいくさふうをひとりで背負ふるぢ印ぐ。サテモくあきろや。酒ぶ
二合だうふ。食もし孫くぢ国産物で。中一時うけさるとこぢんがやつ
うけてもしく合ねく。一度のうけ笑ぢ孫ぢ捻持ふ微つて。きろ二百と
捻ぢう。よしく。ひごろふ三十ぬだうりだやしうちふ切りけてやらう。

シカシ。無物をそなたごの借をめくろ。あんな奴はあもられ損をさせて。やりてくりんぐ。れろきしとさ。彼義を悪くぬ也て。うぬひとり。能子のまぐろ。罪は重てく。待遇連俗なもちろぐ。遊義ひろぐも。らくらあるぐ。ぬはあてもそなたは仲間の差ぐーら。すぐちろとあるの。あの紀徳の能ぐろうぐ。ぬはアろぐ。ふきくろ。ちろぬくらろぐ。食ろうぶ。二度と出過てくはちまち楽屋を足遠さとさ。ト

こすろくちろのぐ。金ぶるろうちあそのくをらくべらくろとおろて。

チョッすぐ今日へ行損ト

ござりまさう。すぐ
ぬきげんよろちろへく。
大きふぬぶさと
行ろはとへく。
トキニぬ家
の湯へ
ごろぐござり
すまと。おろろぐと
ぬ流でへく。李氏
磨さる其のちへ
とんと孫先まるね。
へく。ぬ死下さり
まぜへく。假在行
先まへ毎日の
書面會でざで拙家多ふ

べくろしいはまてう。やおんにける唐紙の排物がござりましたらおへ用
あるべ 假「あゝウ。それはてうどよい。あしたおれは貧乏人ぢやによつて。
現銀でハチト難渋ぢや「久しいものアゝくし 李「十二あんなてゝ紙言つても
あれハ皆虚誕だ。先生は銭ハ大きに留て居るぜ 假「る鋳をゆふ
すい。李氏麿がいふに冬でも蚊屋を肉に吊置き。但ゑものよ下を揺居る
やうな経済家でハないの。此方へ取くろつて不経済ぢやによつて。青蚨の
器物を持もちてね。十二カ嫚斎ハ肉に居ろの「ヘイく佐在宿でござり
ませ。が例の大言をいふつまり縫すくさ 假「此方などのる紙ささぞ
昇しめくるまでもあらう 李「あの人の癖でさ 弟「かげでそろくいふとふふ
ゆへが一ぞんよろし。姫「主人貝ハ中位でござりましたへくし 假「あの
やうに悪く罵て。あの男の耳に入るりのハひよんもあるまい。アゝくく。
イヤおうるべ。やコレく唐紙をもつて来てみらう「ヘイく。さあうもく
べ近日ト呉を「トいふざくさりのよ。どれもくるくとあつてみるが唐紙新
のまるくろをとりかも もてぢや 揃べ。アおめくかーそれよくさね錦絵
唐紙も現金かうるて やらうが。さうさ往堀あるる出所ざ

金を溜る人の癖

「世の中に金などありがたいけうとまのものハないけれのしを存ゐるねれハげが。
通人の酒が女と遊るをつくして。あげくのはてハ金にこまるがさいご。イヤ又
かうするでらくさ云ハ千ぬく。これでそまてとふ千あど。こまるくなりて来た。
アツアありがたいお金さる。よろこそ私方へいらしやいましたへ何ぞでおゑん
まそてあくお稼ぎひや上ます。私ハ主人ともお親とも思て大切に守ります。
むづかしいなども一銭とも決りませう。おまへそとみなもつての外の
さるを下人のぜくふそりあつたら。ゆへうとあげあろつて他に雌カリませ。
勿体ない始もないへ。けいやうくね金銭を。只やるなどくらい不斎な
るでござりますとうう。ソコデお手へさるでもかんござりなさる。皆おまへ
ござりますを。私ハあなたへ文字半銭只やるとらへすへ行かくね。サァテ。
かやうに鼻をそろへて金箱の中にあそんでござりまして下さりますね。
何とぞ早く貸付金におなりなされてお子を夥産で下さりませ。
一夜でもあそをさせてハお手へさるがてくへの冥理がまるへ。ふを産でう

卑迷ゐ俗りなさい。拾ひゐ銭をゑんまをれば又
かーつけまと。銭角長屋へゐるうごぐこまと。
ゐふざつと又百ゐ出あてをとぐこまと紙
三十ゐまゐの冥とゑんて。一ケ月五五二百五十目。
一年ゐ三夢目。ぎづゑ十ゐゑをゐむ。イヤあり
ぐゐるぐ。一ゐゐ倍て一ケ月ゐ一ケ月の利ぐぐ。
サテこゐりの孔。彩又ゐ。ゐ一ぐて
ゑゑ広りちゐ伝しもたとく出ぐぐゐ。
世の中のくゐ銭をゑる月をゑる。
やし雪をゑるのト。高い通者を
みぐろてゑんぐとものぐ。
月をゑるゐ本戸番ぐ
ゐて札銭をゑゐゐ
ゐゐ。銭ゐーぐゑゐ
きるゐのぐゐゐ只

ゑるぐゐく。よー野初潮く
踏根を費して往うどと。物手く
上ゐて陣の絆拂をゑればをむるサ。
それも沢山ゑゑゑゐ。ごぞその銭踏くゐけば
拂ゑゐ山のごくぐ。シカシ。雪踏の裏ぐ
十ゐ又ぐゐゐもうぐ立ぐゐゐ。それぐゐ。
さてゑ。月もゐゐゐ肉ゐ考てゐ刑ぱゐゑゑるゐ。
無月ゑる月を。珍ゐゐ。さゐゐゐゐ。まひまゐ
ゐくゐぐでもしてかゐげばねゑの義踏ぐゐ。
ぐゐぐゐて他の雪又ゐゐく陣ゐ。斤時巨燈ゐゐゐゐゑゐ。
ゐゐぐ。それさく出ぬ今の冥ゐゐゐ。おれハ什ゐゐ
ゐるぐ。ゐゐーゐ巨燈ゐゐゐゐる巨。朝。人ゐゐ。ぐ。ぐ。
ゐ巨。女京ゐ冥の内ゐどの出ゐゐゐゐ。山谷の塀ゐゐ家根をゑ
ぐゐゐぐ。ゐゐゐゐゐの。ゐゐ冥ゐゐゐ。むゐゐゐ冥ゐゐ紙。
ゐーゐぐゐてゐゐゐゐ出ゐゐゐ。イヤあゐゐゐゐゐ。

涼しい高みで昼寝がまくらのとおざる。其うへびんに金銀を費へた。ハテ
あるへと云て吸殺されさへ臣もきられねえ。団扇一本で門口にさくが
るのはさもむ。門口に涼めバ十六文の風が来るが。楼船に涼めバ百両の風が
来ると。金づくにでもかハらバ安い。がひとつの風が高遠ふと板一枚
下ハ地獄の一足飛とりで船にのつて。琴三弦声色ありまをゆらく
ときく。ても安い。まづ手一寸あつらざとど。花火をポンと言りて。シユツ
と消く所ぶ屁の中落。其金が出してゆんさがらく。らうどの利ぶ
をれるうき。月くの利足のるをを考へてみると。ぞうらに銭へつる
られぬものでテ。白くても酒飯ぞとおもつてひやぐとしてよの中に井
戸の中へおくとひ手さよしを。白砂糖つけて食ふなどとハもちの
あくらさ無いくら。あれへ汁としふなれど。撰ぞて三十八文とら酒丸を
生涯三度買つても。丸で買つてくれそれぞうの。豆麦ハ二文で。よろづに
よらず。二十四文の物も買うくさらうが。今あの人が後悔で。二文づつとらふ
てす。微塵つもれバ山となる。ハテなんでも物見遊山が好で。金をす
ぐられぬ。夏を初松魚。冬ハ初鮟鱇と。高いものを食さないが

のどうろ咽を通るるのる。十枚五文の干物を食つても。後に残るる味もなく
同じるすざあてみれバ。下直なものがよいハ。楽のあとハ苦ある。苦の後ハ
楽来ると。其ハ内腿生して。かせぐものハ。老て安楽。ハテちりハたく人
ゆへ。銭金をやたちらして驕ぐ内ハおもしろからうが。それハ瞬のる。
サア苦句あふにあると。すぐの掛乞がうざく来るので。一年中の苦と
なる。その掛ひが済むでみても。苦がたえざるる。又借るそれで
どうして金銭に有るものか。初物を人さきに食ひ。新店へさらに往
若き者ハ代をかく。生鮮の揚句ハ女郎買。俗性づれ家
ござれ。人が誘へバヨイくと。ゆく人ハ一生身がりてぞ。いづれ食之弥の
弥下なごさんでもおごつてねる。おごる平家久しからぬことを。遊芸も
余りぐそへチトおごりませうとしくく時ハ。昼飯をのばして夜食と
一所に食へバ。沢庵の香く二きれで茶漬四膳。鯛やひらめのお菜
よりも。腹をへらして飯を食ふほど旨いものはない。其上に二食ですむ。
夜食に四膳食つても二膳徳がいく。三膳づつとつて三三九膳の所を
二食でハ朝三膳。夜食四膳。〆て七膳となる。そこらが利勘ぞ。まづ

物の道理を考へて[illegible]るぶり。芝居へ行ぐ。役者ぶ働くのごス。女房ハ
ねぐ。只の女ごス。日幸人を日幸人ぶ[illegible]るのごろ〳〵孫ど[illegible]いるもの思
後なるもまい。それハ大切の金猿をあげろ。イヤハヤあきれもの。
ドレく一あ。二あ。三ぶ十あ。そぶみ十あ。これで百あ。ぱと。そこぐ
家賃ぶ三ロあぶれこむ。法券をられてこゝもてうど三千五百両の
のび。ヲヤヤごゝんあこゝでへまゝね。ちど[illegible]ぶてこれ[illegible]ぶりちぐ。
あれぶ色ハこれぐ。ふぶさいろとらふ色るのごろうのろくあるテナ。ドリヤ
人生孫をして。孫の代ぶふ金ぶを[illegible]ろ。酒のろりふ焼塩で
つろうくてだろうみるぐらろ。茶漬を食ひまさろ。
ドリヤ〳〵

金をあくさと人の癖

隣のオ六ぶ[illegible]ふ金の番をして
ありてだろうあるも[illegible]ぶ[illegible]れ
孫へで。あれハ行ぶありろくて
つろうくてだろうみるぐらろ。

ぶろうとろてありぐる金。
ぶろうふあふろうらろて
金ぶ。居をくまろふて
おくもをいりんぐ。
あれふりとろと
よろぶどありろく
つろうくて見せるふ。
あのおやぢふのれと
金ハ労療ぶ生るぐ。
咽ろを干て食ふ物も
食ハぐふ。あぐけまハ
ぶれぐ。てんぐく見性
ぐろうらぶ。本ろ人ろ
迷惑ぐス。そのろせふ人ぐろひぶ
るくて大の気毒悪者。欲ぐるだろうぐ

儲とりかゝるをよしや鉄人。あんまりに金をためても死んでは何に持往ける
ものぢやァない。いきて居る内で活る迄で欲をかくがよい。実子のないは後へ
他人の物だ。大きな屋癡呆。トキニ江戸へべんけいを出してうらやましい
金満だ。マヅト。此内十両で典舗をうける。十夜法話がきゝたい利の殘り
の十両が。サアくどうちを先にきかう目移りがする。まづこれもいけねへ
まつた金をつかつてみようおくらァ。どうも能所へ往ぬもの出来ぬ。
様ござる。考へてみるに。いつでもけちな所でぶんまはして
死金にする。今度こそ活してはづみをとおもふが。酔ときたらくだを巻く鉄人。
マアく法へ。きんのこれ。三百まではつかひ人の武内ひとりだ。まづ往
悪る所までつかふかさ。ヨイくかゝあどん。コレみさつし。神棚の江戸べの
二十両を下るが。ヘンヨウく鉄人ゆゑさ。金といふものは使つてもかへ
つてくるもの。畜生め亀角おれをにくんでまたおいらへ。コレ金よく
きけ。これへ隣のおやぢが所へ行くと労療が出るわ。その金をおれが
所へ来てくれといふのだらう。一夜泊が能晨肩だ。翌日ぢやおへれるへ(?)
チラリと目のさきへちらつくやうで。又にぎやかな所へ往くのだ。ヘン

情なしか。ナゼさうしてくれる。宝がちつと厄を落してくれろエ。女房「おまへが
さういつてゐて。金の何ともおへねへ「べらぼうめ。そこが知恵を見せらァ。
よつく金をてへ出すことをすると小判の耳がきいてゐる。ナア小判よ。
さうぢやァ鉄人かつ 女房「おまへ又それを本気につかひなさんなよ「活ひて置
ても去姉に出ていくよ。女房「おまへアノ貧乏の神のいふ事も承りが
悪いぜ。世はいつと武家よしさ「そしてアノ。こゝろしるし縁者も
三年勤めるが。うんまあ何です。ちやァうけられ鉄へ所よ。又へおく
鉄人が金を持ちておくとおまへ最早つかひまさいか「ぬすァのんあ
つかふのんが。いゝへ。てめへのかんざしもうけやまへ。そうだ。元金武両ちやあ
しの女房「利よりは二両どきつへてん鉄人のさ「ゆんまりまつく鉄人へ
め人を。それで都合三両三分部来よ。大まくに一両。女房「お倉さまが三月
たまつさが。おふァめと井戸岩く人ある殺につかうのおかひきさかへな。早く
よなせへ。おつかさんの殺射がこりいへ「べらおうぬ。出ずめへと云ふやうな
鳥がこうの五百ご生れく。かまゐるの鉄人。能あそのかんうら恩ひし
まーぎろドを候おかわど。たのてこれべい。女房「よしなせへ。何のつかふ鉄へ

皆ころちぶ悪いのぢアな「悪いの去れあらア。ろちいやけぢそりゃ」さう
と。おれぢ衣裳へどうせう。半ぶん出ぢさうな女房「そひ切て皆うけさせるな」
こ中るけあい丹ちまるつを「それもさうぢナ。まづ十あゐにあころる九百ト女房「仰
屋ぶきあ武分「エトびろころもころるかれさ。飯で去出ろこ絞ぢろう拂ひを
とも能ろれど。石絞ぢ女房「お絞ぢ絞てあい絞くよ。酒屋ぶ
ろう絞をちろぢらう「絞を与びゆうぢ紙拵ろス女房「むのいよトろ三
たうよ。幾金でくみつ〳〵アコ〳〵ある八百ぢ女房「それでまア笑いうこと
づくの。それろうあめく。俗又さんあのけがりいろぢ「る。さうぢうけの
ヲこれくこ者ろろよ女房「それも絞ーさせ。よあと紙絞りりんど。
あめくの丹ろめてくをろうぢ丹ろこ絞ろ「返さく。ソコデ
十四あ三分九百ゐ。ろ者武文。ころを三分ゆうめて。俗ゐ代が三あ
ろろろ。絞ぢふよろてメて十六あろ分九百女房「ゆぢあるよ。拵八ぢん
ゐへ去ろ柔さんの屋物を武分武茶み百つろひこんであるぢ「ゆ三ろんく。
あ者ろ今丹ろめと所ろれのみ絞ぢ。それであ〳〵ろ十七ゐ武分絞本よ。
女房「ろ〳〵ても縛るの一拔も去くあ武ろこれ在りぢ。ゐて絞絞

の半紙もコ人をせく。こんなふ切もこ入る。第ろ茶色の裁を買てゆぢ
「買ハ分の女房「あ〳〵も羽織の一拔も拔させ。まんな男いろゐ八絞くと
ろ〳〵ても。ろろう一つあ〳〵ても絞ゐる「う拔ゆ。ゐろあ二分もかけ〳〵ろ
紅ゐオトよろス女房「小絞の面しゐ裏ぶあるとゐ絞の「へこおくぶ〳〵ぢの。面と拔
織。別〳〵ふ八ろるぢろう「コウむじんの蓋つこ絞ひふ一面絞ろうぢやア
絞ゐ。ノウト奇妙。者屋の声ぶさるぞ。図星ろ拔て来こナ。あ〳〵ぢく。
ゐのぶ。朝ろ。朝を買ハべい。一拔拔てろんな。生見。ヨイ拔ら〳〵ふ
ゐ八ゆ〳〵てろんゐ。たの〳〵ぎもあるナ。そのろ八ゐ。ゐ者ろ。ゐ〳〵
朝ハ。ゐ丹をさ〳〵ゐふろて。ゐ八ろ八ゐ。ゐ者ろ。ゐ〳〵の。ヨイ〳〵
拥ゐ。ぶあるろ〳〵ろて。ゐ八ろ八ゐ。ゐ者ろ。ゐ〳〵の。ヨイ〳〵
ヨイく。須。朝のあ〳〵ゐあ〳〵ゐ。ソリやさ〳〵ぶ八ゐ者ろ〳〵てゐ〳〵ろ〳〵。
をろつナ。たの〳〵ぎ絞赤味噌で味噌吸とさう。ヨイ〳〵ぶ八ぢんをく
料ゐ八ゐると。あ〳〵ふ実ぶ絞ゐ〳〵ゐ山の外石風ゐぶぢ。ゐ八ゐ。ゐ〳〵ゐ
どんの者ふゐ八ゐる丹ろふ実を拔けてろんな。あ〳〵者ゐちつこをろう
拔ゐう。コウく必ろを焚つけさろ。おれぢ者ろ方ぢア。潮者ゐんぢア。汁の

漏らはへおぢやるぞ。ヨイかゝアどん。そこの金を出さんか。さて方
丈朱持往はへな。上ア稼ろちとだりあらうぞ今夜買ふまで貸て
遣ぐれい。ナニサつりはいらぬ。邪魔ぢく。ヨイく待とり。その保勢
海苔を買ふ。ヨイだりこの。皆買ふべい。ヨイかゝアどん。
こりや。金朱出さぬ。ハテいかゝ。ケりは受けておくれ。二分持て往
ゆかゝアどん。ためのの奴な物ぢやうでもかぢるともさるぶつて
買ふ。のそんなふ一時ふ買つぶどとねえも買さされべいふ「そりやア
下も出ねぢが。そりやアそう。ねえへねえの見ぶ欲うア。今夜ふもろうり
往はりへりんぢやア稼へ。人間万事三十りへ寄ス。おりひ立ひ日ぶ
昔時ぢ。ちんのるりぢぶ見ぶ。何の伺ぶしとらうへ料理屋へ出へ
往て見さる。あれ一人りでも二分や三匁のへ中てく内ぢ。お辞あそ
をとしぺんくが聴さくるろう。そちこちふ小判とするへ。よしろ。
ヒで飲こやア安いのんぢ。ハウ者屋さん。コウ其のさんぢの下ふある
のへのぢ。業螺ふ。そろう面白し。十だりうん稼へ。コウ一ツの壺へ
二ツ宛いれて。五壺ゆしてそろう。一ツの多ぢやア食見稼へ壺

焼とふ安いたのゝふなつてい。ヨイかゝアどん。見うく八百屋へ
往てゆらうぞ。業ろうく女房へ今ふ八百屋ぢ来るぞらう「そそもぶ
買ふ。ふるゆんう。人間万事皆ふ開ス。トいふところへ女房「ヨヤうい。ふ
さとれば新がさそそぢ。八百屋さん何がある「へこ豆ぶ」の法和さるぢ。
ぬこいふ西く八百屋ぢ来ぐぢ。八百屋。何ぶある。ヒ。何でもある。そん
まく食ぶあろう。なんと一言もあるめく。紅毛のさろまいも。ちやう
さうの赤い菜瓜い稼へ。そりやアぢうぢんぢそこふある三ツ無ふと
生姜。獨活ふ蓮根とふのものを買ふべい。ヨイ稼いてふ。おくよ。
好な物ふ拵ていろ。ヨイ。又何ろ来ぐぢ。七番廿番撥ろ。ヨイそうぢ。
十銭ぢうくんな女房へおりへくそんなふ買て伺ふ。ちなさる「ハテいな。
ぶるぶ買千ぢ。買千や八十いよ。ふるいるもふもあつうひなさるつ。こそ紙
買ておけば半年いたろ。ふりぢ。ヨイ。買千よ。よしく。稼ぢを出て
いろう。ヤイくそそ往くのへ伺勢屋ぢやア稼へう。四方ろ。ありがとう。
激ふをふ神ぢうを拵て来や。たろこ今さ来く女房「あゝ神
買ぢと一神ぢ買なさ。ナ。盃ふこまるくとふ。「ハテいろさふ神や

八律の酒にお同盃ろで平げておくれふうける。そんなけち助の紙へ
ゆんぐ〜ハテ人間万事世界の割ス。陣の才六をこそ安ふ金をそう
拵居ても紙〜移へ。
まやそこへ来さのハ
何金ぞ。エ。
ひゑ金山寺。
ヲイ如もろ。
四光
接接の
蕃椒ハ
なーしろ。
ある。奇妙く。ゆすな
でそうえる。そ残ハ
そこふ出てあるうち
拵紙移へ。ジット

来さう。こりゃハらく出よ
たろと今七りろを買て。
又接ねきさう〜ハテ赤きてあるを。
七色も接ねきもそまくの
味ぶあるて食てくれぶあるハな。
七色ぶ女ハ妻ゑうう接ハ妾と
ひゑりんぐ。ジット来さう。四方ろ。
滑ふ赤。こりゃぶ今ろう二ちえんやぐ。
ひし来ろるるぜ。こりゃ市。其侍りで
山椒を一ちとナ。赤味噌を出ぐ
拵て来や。ジイくその袋ふ来へ
倚て。グウット上向ハ来ろ拵て
来いと云てくれや。コウかゝどん。
向ふ裏のお源さんと、人を義さんと
を吉公を呼で来さう。ひし味噌ハ

義味悪て。煮ても焼ても。さてこまるものさぜ。そりやア。さうと。松の節ぶ来しらう。
金ゴまさうなもの。「なぜ」「先ア」「中」「発を出すと」「言て」「言て」「発ベ」
能き事ざのう。「ヒヒ」ハ湯屋を買へつうと思つ居るぶ。まず買へばそ
ハ。さホ「なんの買ヒ」ナ。金のある時。出帳を建立さるぶいく。
あれも頭巾を買つてト。まづ草へを買へべい。こうう草も捲
さうう紙ホーべい。京傳ホせうう。江戸橋の竹屋ろ。石町の松軒ろ。マア
ひと軒の内でずくちもア拵ア拵へス。コウ代るうう。稼ぐるぶ買ハ芝居ホ
せうぜ。羽ヒの堺町の九ろうう。ひて見べい。あまをこの内の狭といふ者へよく
出来ると者ざよナア女房「贔屓町も見てよ」「ひくぶいく。ぞうせ新道の雑
長ハひくりんざうう見ヒ」「ヒヒ」ハまもいぶ。山草も一鉢拵てよ。
コレ見なさ。ナント能くけまを云つとめさるエ「ウ」拵て来るべい。ナアきろい
るアア稼ぐヨウトけ拵ろ。よくきろく。「蕨」「なる」と酒落ろ。ナニ。コレ
人間万事皆ハ隣ざ。コウ奥のお田さんを待て来稼ぐろ。アノ代物ハ酔
とチトいやにくさるれど。まぶるおいく。ライ蕨ケ稼ぐ。こうハ南安こざ。
大儀ニ百六十四文とそうく。ライ沙金さんの。二荷いれてらん稼ぐ。

そして一盃呑で。ひき稼ぐ。ナアころ金さん。ぼろくうあの人ぶ。
りんろ。ハテ人間万事世皆ハ隣ス。

浮虚なる人の癖 并ホ不實者の癖

●ひ見なさいト。ちゑ見をホくろ。▲自身上手あくご堂建立ッ●ヲマトそんな
ちる気ハうんざうご。ヨヤウうあ金飯ろ。ヨヤく早いのう▲ナニ早ろア稼ぐおめく
さうんざア朝森坊ときてみるうう。他のお金ハ朝飯ざらう●かハいさうな
こそ知いひ稼ぐな。見ちらハそんな朝森ぢやア稼ぐよ▲早くて四りこさ
●ごりんよ。ヘこ。よろしくやておくくき▲ハイさあうあう●きろいちゆれざよ
コウお猫さん。ろくハ旦那さるがおれ出ぶあつこぢやア稼ぐろ。▲ウョきいて
らんな。横町の御お内さんと堀の内さるハ。ハ稼ぐよ●後生稼げくごの▲後生ハ
稼ぐつぶとしも。ゆるくて。ほろのまとうう。遊びホ稼ぐくのト。こごとくいくのを止て
りくハて。ホニラくくさくとさるハホ●ようち安てあさるな。こごとごと
ちろくうりい。畳奥ざとろてちやにておな。ろちりア亭主と
りく者ハ結さるア稼ぐ。ホれもうる甘く物ざらうのッ▲ナシダりこ稼ぐ。

持参のさとさま〳〵。さく様ごもみちく人ごらう○ヲヤ
これはもごの。けだものいさうでいらつしやいまと。ろうちらア
娘様ごの。ゴ猫の
猫へ娘ざ
くろ
亭主の
ろうけへ
ゴ家
さ〳〵。
ホニヨ。ちやれへ
のけて。亭主も
たの〳〵さるも わらうぶ
会るあやア あこれるるもわらうの
▲あるの所ぢやア猫へいる。肉猫のある所で
主婦げんくもあとる。年中好面も

猫へいる。そんな時あやア。肉ゆみるが
ぶでる〳〵ねゝ〳〵れど。あのらア矢出猫へ
黒も。ア〳〵と堪忍して猫をさとろて
猫らア。ホニヨ〳〵ちゝ〳〵〳〵るが
あるよ。これもあれが肉果よ。ちんホの。
肉果ゝどきをるぢやア猫へが。
兄貴がどうらゝで猫へと。
あいらア。こんな肉へゝどきへ、
ちねゝ〳〵れど。ちゝらは
ちゝふゝとゝ者ごろ。
彼猫が紙蓋の亭主を
持ちのさ。猫へ行ゝむ
ろうけも猫へ●へこ猫あるふくの
風をゝて。ゝるちどおゝさるへあちふく
どうせへちゝやうちらの多上ぢやと。亭主へ猫へと。

あさらめるぶ早いつる▲さうさ。はざ亭主さるの分でもはざ不呂ふそー
ろとろろ。天秤ふかけると。中ろろ。ぞろきりさ。あるくなんぞも。おりうけ
亭主へ持ちさんる。お茶とりん内ゆも。美人でも帯をおびさわど幸せる
りのへあんめ。それざろろ。どの出るる美女でも帯ふかけるとの。うざるる
ろるる。お床のあげ。お臣ろろ。金の下のるゆで一切ぶ甘い女房一人と
りのりんざろろ。旅ぶ。あろびる出ろ。ひぐあろぎれぶきるる出ろ。イヤハヤかろる
ざるぢやア行く。コレ中あ。ちろろとさろてんな。ぶざさく。泥紙の出ろぎ
ろろ。縁へ物さりんざア。人一倍ひゆぶかくらァな●それでもあるくへ。たーなる
ぶ解ろろ。ぶきれのぶ。表の金さんぶあるくのるを。男好のさる見ざと
ろろさよ▲ヨヤ否よ。きさぶ臣へ。中ぶーもあるる。濃ふのさるの金さん
ぢりぶ。亜でもあろぶて。ホとニサ。お茶菱ありでも解ろ。なんぞおぶろう
●中ろ旦那さるふさろろ色出ろと。ろろて▲ナニおかゆひなるぶ。一生屁を
ひり合ろうとりん出ろさも行く。ちんの一時のぶれさ●ヨヤきろへ情は文句
ぶの▲猿金もさけアろア。情も行くのス。あるくなんぞもあれぶ異見ホ
はへて。かるろろと亭主へりちるさんさ。ちろともよけいふ楽をーる。

獨身わど楽なりのへ行くゆよ●そりやア。あるくぶいへどそれぶ。アア一年も
たんと楽をさるぶ徳よ。おビ紀ぶ安心ー行くろ。そてでそでゆろ行くる
▲それもさうぶ。そろへ吃先であやるさ●あのらぶかくさんへ甘い那
ぢやアいるゆへるどビてく。ろちぶまへ出ると。先ぢやア新道と曲て
ろふひねるろ。むづかーいとへゆ出ろさ。アー。なんふ(て)もいゆぶく。一生へ
どうなるりんろ。それ行くで持さりんぶよのう▲一生へ風次郎ス。美へ肉へ
二度と行くろ。美へ肉へりのさるゆ。ホニノでさりこぶさも三十四ゆ
ゆでぶよ●ヨヤ。ありくそのろーゆでもおけてりをさる言ろ▲ナゼナ●チトおも
てくのゆろちちアニ十ゆでとろへ▲さういへなさんな。お中さろ行くんな。
ろへぶろけのたくく婆さんぶ。ゆへふつくるぢやア行くろ●そりやアろるでも
行く。お茶菱へ古強乳とる中ろ。白粉も濃のへいゆぶの▲らさへるさ●コウ
柳さんぶろへのへ行くで出て亜きやア古行くく▲ウニヤ。ろへへ行く●ハテナ。
そんなろう松葉祝と。まぢくいとで。一なんろへぶ亜▲なんぶろあ中へへの
●そんなるゆでは亜さ。あへらぶ中ろる五番五葉金珍ホ行のぶあるりのろ。男を張る
までふぶるるくへ行くへる。コウ。何ろあへーさうる物をおえぶの。チト下界

ゆうぢやア稼へろ▲げびるまろ。あんと稼ぐよ。あのこいりんぢやア稼へゆへべ幕の内を買へこと煮染が買つて呉さろの。真中へ寝命をおしてジヤと丹ろ臣ころ。陰ぶ寒くてへんぢやうらいぐ●いろるるもても紅毛料ぶぎこのウ。それぶお前ちるるもの大者ろ▲えろぶ稼へぢやア ねへろ●ちろろ金をおろろ▲稼稼壷へろ●おえぐろとりへべ。ろろちぶ和のへ言ろう出る時弱ぐぶ。さろたりぢろ稼へいる。おろへのをろへも世へなうや。コレコレなのけ面ろぐと（ひをに角かしてをを）▲ちんぶのウ。おろへ後生ぶ能ろ。それでつろ稼へのぐ。言のへ者ア。おえぐろぶ早くえげるとさ。おのらへいけ根性悪ぐろ。稼ろみふちろとぐ出さと。おろふへくよ●さうひなさえんなおへへの歯へのりぶ能のぐなる。ろへちらア二重つけて出ろりぐ▲おえぐろの出が稼へのへこまるよ。おいらア幽宮さるのおたろりぢやア稼へ。稼のれへも淡ておのころろ。言へつろへ言ふぢろひる。物ぶ国の酒ぶたまろて。ドンとおるろろ。分体稼へとおろちやアへへくくこ面ぶ。ひたのへちろとと幸へよ●幸くても行常ぢろ。コウ。後ふ面ろを刺てんぶ。後生ぐ▲ろ刺てやらろ。おれぶのも刺てんぶ。おへへのへ稼ぶ能ろ。ちろれとて刺業ぶさるるれど。おへろア

切る稼ときておるろちたドゆろ稼へ●ハイく出ぶく。先ろろ依。まろぴちぢ。兎さりゆ〜▲ちんのろ●いよ。ちろれでも稼へ。おへへのぶ坊主ろりさろ。ろろちろのへ奴稼さ▲おぶ氏さんの稼ぶへまろ毛ふ三本あるぶ。おれへ行稼ぶ●ふ徳ろりとでもへへぶちろう▲ふ徳ゆも比本のぶあるへな●そんろ三毛猫ろりさ▲こ毛へ色ぶゆドるへな●そんな面倒なるへちろ稼へよ。先の辻番でき〜ぶへく▲ハイく かへとゆりゆ〜。そりやアさうと。刺刀をお徳さんふかして出ろこ。ゆぐ面さ稼へ。おのふへなげゆりさんぶろぶぞ。貸さりのを稼ふ稼へきやア返さねへ。そそてろでも斬を止てよこと●上りの冨どんふ麻布でりへひる▲あらぶ内ぢやア麻へ稼ろな●そんなろろちぶ麻でりへろてやらろ。おのへへまぶ能よ▲そそてふへろさな男ぶのウ●ろヨ言稼やの才三とへへ和ぶ。分のぢろあるの。おへへどろ和へへろ。ろろちらア。実体な見で。唐様拵ひの好男とへへよりへ。あへ男を和で。源来の字俳りろ。そそろぶ〜紙紙へへ者で順へへとへへ男ぶ好番ふ▲ろやアさろさ。小ぶでもきへて。和合な男へへろ。稼ぶへくつても能へへ●稼ぶ幸ろ。

違ふ縁へかんざのう▲志んし違ふのもあるよ。石部金吉金兜といふ男を好く者もあるのさ●さうさ。されど。手お務をいふ男もあらうが。悪い男を律義なのが良い。好男の堅義は傍で見て憎いものさ▲好男の者家なのは玉に瑕ともいふが。亭主におくらう世話が焼け縁へでよからう好男などは女房に世話を焼かせるものさ。悪い男の癖に。さるやで女房に甘ふ氣を焼かせるもあるが。それは一向式。第にも様にもかからぬ縁へのぞ。おらァお君さんへおやくり着ぐてらのよ。なぜと云って見んな。清あらさんの様な亭主へ妙縁へかよ。まづ身一男がよくて気気で。姉御がなくって世るがよしろ。女房をかへのグろて夜ど寄りにも出ぎてさ地色ぎらひて並べるとあべ。人のつき合もさせる。老中も若い者にも氣があって酒もふるくへのまぜと様もないつらへだぞ。いホンてに施の垢ほどもないぶんの縁へんぞのウ●全体お君さんは一番ぞ▲そりやア角が違ってへる。あれがあんの。熊月日のかで生まれてといふのさ●それでもお顔にお見をいふが勿体ねへぞよ▲あのらあらべ律んで招居らア●あの子はうろてくると男四徳がある▲ヲござあへるぞ。あろくてに好男はかられねへの●ダガ悪い女ちど好男を亭主にするかよ。

そこもでござらうようちへお楽ださおめへさんぞへお美しいもう。ヲツトおなまらう▲又きぐまつてさ●そりやアいいが。お猫さん。堅の酒る本所のお開帳から。浅草の観音さまへ来らうぢやア縁へる▲よからう。アノ開帳へは役者が名稿に出るとよ●おんにかご又かつがうと云って▲うそをつけ俗にいるかのろ●ヲヤうれしいのう。ちへどうぞ紀の国やの出る日に往く人のう▲おのらア贔屓でさ●ヲろちやどろちでもいい▲ヲヤ嬉の変へ。道理でひるまへ贔屓と同じ猫を縁へ比翼に付けて居る。ぞろちらでもといふ気ぞのぺこないきざかいく●いへなゝ。おそろしてござる。おめへも兄があらうちお猫を▲きついのさの。おのらア亭主の縁を知せてさ●へ三夢中のきれも縁のその位な者ぢやアござれど▲なんでもいゝよ。情だよ。まうち締合せて歩くさ。●そんなに悪忌して居らう▲悪忌もおくじけざ。コウおめへ見ねへ紬を着て往く●半襟物さ▲そりやア先れるさうだ●コウく伴婆さんの着る物にあつちやア気障ぎの。路考茶も山の手の婦女がもう細らずとも▲けふは流行物が違ざるんさ。けふ紫縮緬の模様を黒糸で縫わせて。對に着て二人連が通るからいつそ気で

四十八癖第二稿畢

この編はいと著述出来
遅く賣出し〜やい

江戸

戯作者　式亭三馬戯編

浮世繪師　歌川國直狂画

文化九年壬申三月脱稿
仝　十年癸酉正月開市

錦繪草紙書物問屋　雙鶴堂
江戸田所町
鶴屋金助梓